

## 【論文】

# 青少年教育施設におけるボランティア研修会の効果に関する検討

林 幸克 谷井 淳一

(国立オリンピック記念青少年総合センター(非))

(国立オリンピック記念青少年総合センター)

A study of the effects of volunteer training courses at youth educational facilities

HAYASHI Yukiyoshi TANII Junichi

(National Olympics Memorial Youth Center (Temporary Staff))

(National Olympics Memorial Youth Center)

### 【要旨】

本研究は、青少年教育施設におけるボランティア研修会の参加者が、研修会を通じて見せた変容と研修会の在り方を検討した。716人を対象に、研修会の前後で同一項目の質問紙調査を実施した。因子分析の結果、研修会に期待される効果として「コミュニケーションの自信」、「ボランティアの多様性の理解」、「解説技能を伴う指導性」、「自己実現への意識」、「国際性」という5側面(因子)があることがわかった。すべての因子で向上が見られたが、とりわけ、「ボランティアの多様性の理解」と「自己実現への意識」の向上が大きく、研修前は社会福祉等の特定分野の活動をボランティア観として強く抱いていたのではないかと思われる。それが、研修後には生涯学習社会における自己実現への意識の高揚も含めて、ボランティア活動が多種・多様な分野・領域に広がりを見せる活動であることを理解するに至ったと考えられる。

### 【キーワード】

生涯学習 自己実現 評価尺度 ボランティアの多様性 コミュニケーションの自信

## I 問題と目的

1965年のユネスコの成人教育に関する会議において生涯教育の考え方が提案されて以来、我が国においても、生涯学習・教育に関する様々な答申が出された。その中の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯教育の振興方策について」<sup>(1)</sup>(1992年)では、当面重点を置いて取り組むべき四つの課題が上げられ、その一つに「ボランティア活動の支援・推進について」が挙げられた。伊藤は、青少年に各種生活体験が不足していることを指摘した上

で、ボランティアは、「自然体験、タテ社会体験、奉仕体験、勤労体験、自己充足体験」などの総合的要素を有する活動として捉え、「他者とのかわりかもたらす社会性の啓培は青少年の人間形成にとって貴重な糧である」としている<sup>(2)</sup>。青少年教育に対して重要な責務を担う機関として、全国の青年の家・少年自然の家には、青少年がそうしたボランティアに関わることが可能になる活動を企画・運営することが期待されるであろう。

讃岐は、ボランティア活動の支援・推進について、青年の家の、ボランティア活動に対する

関わり方の具体例として、次の三つを指摘している<sup>(3)</sup>。第一は、すでに特技や知識、技術を有しているボランティアの受け入れ、つまり、ボランティアの活動の場を提供する機能、第二に、生涯学習社会におけるボランティアを育成するために、活動に取り組むための知識、技術等を習得させるために行う「ボランティア養成事業」を通しての関わり、第三は、「地域の生涯学習センター」としての役割・機能を担うという点である。これら三つの関わり方は、一つのサイクルとしての繋がりがあられるのではないかとと思われるが、本研究は、特に「ボランティア養成事業」に着目していく。

青少年教育施設ボランティア研究会の報告<sup>(4)</sup>によると、青少年教育施設に登録しているボランティアが実際に取り組んだ活動は、子どもにスポーツなどを教えたり、障害者やお年寄りを支援する活動が上位であり、また、内外学生センターの報告書<sup>(5)</sup>においても、子どもたちにスポーツ等の指導をしたり、お年寄りや障害者を助ける活動に取り組む場合が多いことが明らかにされている。これらの結果から、直接、対人的接触を伴う活動が主要な活動になっていることがうかがえる。

ベネッセ教育研究所の調査<sup>(6)</sup>では、高校生の社会的活動への参加意欲について、福祉ボランティア、身近な環境の保全活動、漂着重油の除去作業（調査当時、タンカーの重油流出事故があったため）などに関して、6割前後の者が参加したいと考えていることがわかった。青少年教育施設ボランティア研究会の報告<sup>(7)</sup>によると、青少年教育施設のボランティア養成事業において実施頻度の高いプログラム内容としては、ボランティア活動に関すること、レクリエーションに関すること、野外教育に関すること、自然理解・自然保護に関することを挙げ、ボランティアについて理解し、活動していく上での基礎的知識・能力について重要視している

ことを指摘している。

活動者の資質・素養という側面からは、全国子ども会連合会の調査<sup>(8)</sup>によって、ジュニア・リーダーとしての活動経験者（主に高校生）の方が、経験のない者より、何かやろうとする際にはいつもリーダーになり、人前で自分の意見をはっきり言うことができる傾向にあることが明らかにされた。また、活動を通して、自信が持てるようになったり、人前でも自由に発言できるように変わったと感じている子どもが多いこともわかった。一般に、最近の高校生は、他人と一定の距離をおいた付き合い方をしているように考えられているが、ベネッセ教育研究所の調査結果<sup>(9)</sup>からは、高校生が友人に対してできることとして、友だちと意見が違ふとき、自分の意見を主張できる生徒が79.7%おり、友だちの間違ひを指摘できると回答した生徒も64.7%であり、他人に対してしっかりと意見表明できると、高校生は考えていることがわかる。

また、今日の国際社会を背景にしているのか、留学や仕事などで外国に行きたいと考えている高校生が52.4%おり、57.0%の生徒が将来的には、日本語と英語を混ぜて会話できるようになると思っていることがベネッセ教育研究所の調査<sup>(10)</sup>からわかる。同調査では、在日外国人との交流に参加したいと考えている高校生が66.3%、海外の平和維持ボランティアへの参加意欲を見せている高校生が57.9%存在することもわかった。内外学生センターの調査報告<sup>(11)</sup>においても、56.5%の大学生が、留学生に対してもっとボランティア活動を通して手助けや交流をするべきだと考えていることが示された。青少年教育施設ボランティア研究会も、現在行っているボランティア以外に希望する活動として、「海外協力や国際交流に関する活動」を希望する者が31.2%いることを報告している<sup>(12)</sup>。

総務庁青少年対策本部の調査報告<sup>(13)</sup>によると、ボランティアイメージについて（全24項目）

因子分析した結果、第1因子として、貢献的精神を示し、無償性や自主性をも含む因子として「貢献スケール」を示した。第2因子として、自分自身の楽しみや遊び心が強く表出される「遊びスケール」を、第3因子に、ややボランティア活動を否定的に見ていると考えられる「偽善視的スケール」を抽出した。千石はこの結果を、若者の価値観は、「社会貢献を手段として自分が輝いてみたいという「自己表現」であり、「遊び心」の承認こそが社会への貢献をもたらすことを事実として証明している」と解釈している<sup>(14)</sup>。また、埼玉県立南教育センターの研究報告<sup>(15)</sup>では、ボランティア活動をしてよかったこととして、相手に喜んでもらったこと、自分のためになったことを回答している生徒が多かった。

このように、ボランティアに関して、実際の活動内容やイメージ、活動者の特性等、様々な視点から調査が行われ報告されてきた。一般的に、ボランティア活動というと、福祉活動や奉仕活動による人助けを連想する 경우가多々ある。もちろん、ボランティア活動には、そのような側面があるが、それだけではない。伊藤は、「不可測性に遭遇すると、身につけているすべての経験や知識を総動員しなければならないし、その結果として、問題解決能力や主体的な意見形成をもたらしてくれる」<sup>(16)</sup>ことを指摘し、不可測性が当然である活動としてボランティア活動を挙げている。このことから、ボランティア活動は臨機応変な対応能力の育成にも有効であることがうかがえる。また、他者との関わりを通して、相手の立場になり、相手を思いやるやさしさや、自分の意思をはっきり表明することの重要性を学ぶ機会にもなるであろう。さらには、ボランティアとして自分の持っている能力を活かすことで、生涯学習ボランティアとして、新たな活動の場を発見することも可能になる。今日の生涯学習社会において、

豊かな生活を送るための中核になる活動、それがボランティア活動ではないだろうか。そのようなボランティア活動促進とボランティア育成のために、ボランティア研修会に期待される役割や社会的要請は極めて大きい。しかし、研修会の成果がどのように表れているのか、また、研修会を通じて参加者が何を学んだかという点についての調査はあまりなされていない。この点を明らかにすることは、当該年度の研修会のねらいがどう活かされたかを自己点検するだけでなく、今後の研修会の充実・改善に向けての貴重な資料を提供すると考える。本研究の目的は、青少年教育施設が実施しているボランティア研修会の効果を、数量的に検討するための質問紙尺度を開発することである。開発した尺度は、研修会の改善に役立てるとともに、尺度自身も、常に時代の要請を反映し、改良されてゆくものである。その意味で、現時点における評価尺度の一サンプルを提供することをねらいとしている。

## II 方 法

### 1 調査対象

2000年5月～2000年8月に、国立青少年教育施設が主催したボランティア研修会に参加した高校生、大学生等を対象に、記名式質問紙調査を行った。13施設14事業の研修会の協力を得て、研修会の開講式にて事前調査を実施し、閉講式にて事後調査を実施した。14事業の合計で、事前調査では733人、事後調査では730人の回答を得た。このうち、事前調査と事後調査の両調査に回答した有効回答者716人のデータを分析対象とした。

### 2 調査票作成の手順と調査内容

国立オリンピック記念青少年総合センターでは、国立青少年教育施設の専門職員を対象に、1999年4月～2000年4月にかけて合計3

回、「主催事業の評価方法に関する研修会」を実施した。この研修会のねらいは、第1には参加者が調査方法の基礎を会得することであり、第2には参加者の事業企画経験を調査票づくりに活かしてもらい、調査項目を検討することである。1999年4月の第1回研修会で作成した調査票に基づき、1999年度の青少年教育施設が主催するボランティア事業で実際にデータ収集をし、そのデータについて因子分析を中心とする統計処理を行った。

この結果を踏まえて、青少年教育や生涯教育を専門とする大学教授や実践的研究者の助言を受け、それらを参考にしながら項目内容を再検討した。すなわち、研修会を通して変容が見られると思われる、他者への接し方、野外活動等の活動の具体的な知識・理解、リーダーとしての自覚・自信、国際化への対応、自己実現への意識等、「研修会の効果に関する項目」として29項目を決定した。

調査票は、事前調査票と事後調査票からなる。事前調査票は、上記の研修会の効果に関する項目に加えて、参加者の氏名、年齢、性別、校種及び学年といった属性を問うたものである。事後調査票は、研修会の効果に関する項目について、事前調査票と同一内容で実施したものである。なお、事前調査票、事後調査票について、同一人物の対応関係を判断するため記名式で実施した。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 男女別・校種別参加者数

参加者の内訳を男女別・校種別に示した(表1)。性別では女子の占める比率が70.1%で男子よりも多く、校種別では高校生の割合が全体の60.9%であり、また、女子高校生が回答者全体の46.9%にあたる。参加者の平均年齢は全体で18.9歳、男子が20.0歳、女子が18.5歳であった。なお、「その他」という回答者が84人で全体のおよそ1割を占めたが、年齢層は16～57歳の幅で、平均年齢は28.5歳であった。

#### 2 ボランティア研修会の効果に関する項目についての因子分析

ボランティア研修会の効果に関する29項目は、5件法の尺度であり、データ入力に関して、「きわめてあてはまる」を4点、「かなりあてはまる」を3点、「わりとあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。これらを、主因子法・バリマックス回転を用いて因子分析したところ、解釈可能な5因子が抽出された(表2)。第1因子は、高齢者や障害者、子どもに対してやさしく接することができ、異国の人々にも親切にすることができるなど、対人関係に関する自信を表しており、「コミュニケーションの自信」と命名した。第2因子は、ボランティア活動の活動領域の広さや、現代的課題と

表1 男女別・校種別参加者

(上段：人数，下段：%)

	高校生	専門学校生	短大生	大学生	大学院生	その他	小計	無回答	合計
男子	100 (14.0)	6 (0.8)	2 (0.3)	62 (8.7)	4 (0.6)	40 (5.6)	214 (29.9)	0	214
女子	336 (46.9)	5 (0.7)	38 (5.3)	72 (10.1)	7 (1.0)	44 (6.2)	502 (70.1)	0	502
合計	436 (60.9)	11 (1.5)	40 (5.6)	134 (18.7)	11 (1.5)	84 (11.7)	716 (100.0)	0	716

表2 ボランティア研修会の効果に関する項目の因子分析

因子名	項目名	F1	F2	F3	F4	F5	h <sup>2</sup>
コミュニケーションの自信	* (26) 障害者に対してやさしく接することができる	.72	.26	.09	.16	.15	.65
	* (13) 高齢者に対してやさしく接することができる	.72	.24	.10	.16	.02	.61
	* (20) 子どもに対してやさしく接することができる	.64	.12	.20	.19	.04	.50
	* (21) 人の喜びを自分の喜びとして感じることができる	.56	.10	.22	.38	.11	.53
	* (15) 様々な国の人々に親切に接することができる	.55	.19	.21	.09	.42	.57
	* (10) 相手の立場に立った行動ができる	.50	.17	.40	.29	.06	.53
	(14) ボランティアに取り組むことは生きがいの一つである	.49	.36	.03	.48	.09	.60
	(23) 言葉がわからなくても身振り・手振りでコミュニケーションできる	.45	.23	.35	.05	.39	.53
	(5) 人の意見に耳を傾けることができる	.45	.08	.26	.28	.07	.36
	(22) 自分の知識・技能を他人のために役立てることができる	.42	.25	.38	.36	.21	.56
ボランティアの多様性の理解	* (3) 生涯学習ボランティアについてよく知っている	.17	.65	.16	.16	-.02	.51
	* (17) ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている	.12	.65	.27	.15	.07	.54
	* (6) 社会福祉についての知識・理解がある	.28	.64	.13	.07	.00	.51
	* (24) ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある	.27	.60	.22	.08	.24	.55
	* (1) 環境保護・保全についての知識・技能に自信がある	.01	.58	.26	.14	.12	.44
	* (16) 野外活動についての知識・技能がある	.16	.53	.39	.05	.06	.47
	* (8) 海外のボランティア事情について理解がある	.15	.51	.09	.13	.37	.44
(11) ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある	.20	.47	.47	.22	.12	.55	
解説技能を伴う指導性	* (12) 見本を示してわかりやすく解説するのが得意である	.10	.27	.75	.19	.09	.68
	* (28) 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	.16	.20	.73	.15	.17	.66
	* (27) 人前で自分の意見をはっきり言える	.23	.23	.58	.09	.20	.49
	* (18) 状況に応じて正しく判断し他者を導くことができる	.27	.37	.57	.17	.12	.57
	* (7) 集団でのゲームなどの指導をするのが得意である	.26	.31	.54	.16	.08	.48
自己実現への意識	* (2) 他者に奉仕することは自分の人生を充実させる	.27	.24	.09	.60	.09	.51
	* (9) 新しく身につけた学習成果を様々な場で活用したい	.28	.05	.22	.59	.25	.54
	* (25) ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	.36	.11	.14	.54	.22	.51
	* (4) 自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	.11	.22	.33	.51	.15	.46
国際性	* (29) 異国の文化や言語などに興味・関心がある	.05	.05	.20	.16	.75	.63
	* (19) 国際的な分野で活動・仕事がしたい	.15	.14	.10	.24	.69	.59
因子寄与		3.98	3.74	3.55	2.38	1.93	15.57
寄与率		13.72	12.90	12.24	8.21	6.66	53.69

も関連した生涯学習ボランティアについての理解に関したもので、「ボランティアの多様性の理解」と命名した。第3因子は、道具の使い方等を見本を見せながら説明することや、人前で自分の意見を発表したり、集団のゲーム指導をする自信等を表し、「解説技能を伴う指導性」と命名した。第4因子は、ボランティア活動を通して他人のために行動したり、学習成果を将来的、継続的に活用しようという意欲を表し、「自己実現への意識」と命名した。第5因子は、

異文化に対する興味・関心や、国際的な分野での活動志向を表し、「国際性」と命名した。抽出された5因子についてクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、「コミュニケーションの自信」は0.90、「ボランティアの多様性の理解」は0.87、「解説技能を伴う指導性」は0.86、「自己実現への意識」は0.78、「国際性」は0.75であり、十分な信頼性が得られたといえる。

### 3 ボランティア研修会の効果の考察

#### (1) 因子合成得点による検討

ボランティア研修会の効果に関する5因子について、研修会の事前調査時と事後調査時の因子合成得点の平均値と標準偏差を算出し、対応のあるt検定を行った(表3)。同一項目で特定の因子に0.50以上の因子負荷量を示し、同時に他の因子負荷量とは0.10以上の差があることを基準に、表2中に\*で示した項目を選び、因子ごとに合計した。そして、その合計した得点を項目数で割って、各因子の因子合成得点とした。例えば、「コミュニケーションの自信」については、6項目の合計を算出し、その合計点を6で割り、因子合成得点とした。従って、因子合成得点はすべて、0点～4点として、比較しやすいようにした。なお、サンプル数が716人のため、検定の際の有意水準を0.1%に設定した。また、統計的には有意ではあるが、平均値の差が標準偏差の2分の1を越えない場合は、「やや効果があった」として考察する。

従って、「ボランティアの多様性の理解」(0.59点増加)と「自己実現への意識」(0.42点増加)は、研修会前後の参加者の変容について、この順に効果があり、次いで、「解説技能を伴う指導性」(0.37点増加)と「コミュニケーションの自信」(0.26点増加)はやや効果があった。また、「国際性」については、統計的には

有意差が認められたが、その変化は少なかった。

「ボランティアの多様性の理解」についてみると、事前の得点が1.16点で、かなり低い。これは、坂口が、ボランティア活動に関して、「かつては、慈善事業や、博愛精神の発揮というような一方的な受の実践であった。与えるものはいつも与え、受けるものはいつも受給するという方程式の社会福祉であった」<sup>(17)</sup>と述べているように、ボランティア活動とは社会福祉活動であるという一般的通念があり、多様な活動分野に対する理解が低いことを示していると思われる。それが事後では1.75点にまで上昇し、かなりの向上が見られた。名賀<sup>(18)</sup>が指摘するように、ボランティア活動が求められる背景には、多くの人々が、心の豊かさや、人間性を一層求めていることがあるが、活動の多様性を理解することが、人々の活動の幅を広げ、より一層活動に参加しやすい条件を作っている。「日常生活の中にまずボランティアの原点が存在」<sup>(19)</sup>するという意識を持つことや、日常的なボランティア活動の取り組みを促進し、ひいては、あらゆる場所・機会の中に、ボランティアの視点を持てることになると考えられる。

「自己実現への意識」に関しては、事前で2.52点と比較的高い。これは、この種の研修会に参加する人たちは、もともと活動を求める意識が

表3 ボランティア研修会前後の参加者の変容 (4点満点)

	事前調査 (716人)		事後調査 (716人)		平均値の増加分		t 値
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)			
コミュニケーションの自信	2.51	(0.78)	2.76	(0.82)	0.26	13.34***	
ボランティアの多様性の理解	1.16	(0.74)	1.75	(0.84)	0.59	25.43***	
解説技能を伴う指導性	1.46	(0.85)	1.83	(0.92)	0.37	17.38***	
自己実現への意識	2.52	(0.81)	2.94	(0.85)	0.42	17.69***	
国際性	2.18	(1.15)	2.37	(1.16)	0.19	6.79***	

\*\*\*p<.001

(注) 表2中に\*で示した項目の合計点を算出し、その合計点を項目数で割り、因子合成得点とした。

高いことを表すのだろう。事後では2.94点と、さらに向上している。研修会への参加は、ボランティアとして活動することが自己実現や自己教育力の育成にも繋がるという意識を高めることに有効であると考えられる。坂口は、青少年の発達課題が主体性の確立であると指摘した上で、「不思議な出会いと意外な体験のできる青少年のボランティア活動こそが、将来大いに役立ち、人格形成に寄与していく原体験」<sup>(20)</sup>となり、ボランティア体験が、自発的能動的な行動のできる、責任ある社会人への成長を助長するとしている。青少年教育施設におけるボランティア研修会は、このような青少年の発達課題に立脚したものであり、具体的な活動イメージをさらに広げた結果、自己実現の意識を高めることに効果をあげている。

「解説技能を伴う指導性」では、事前で1.46点と、「ボランティアの多様性の理解」の次に低い。自分の意見を発表したり、他者を指導することは、そういう場と機会に恵まれなければ、なかなか育ちにくいものなのだろう。その分、少しでもそうした意見表明や指導がうまくできれば、その自信が向上しやすいとも考えられよう。そうした指導性の育成という面から、生涯学習審議会答申は、「ボランティアを受け入れる施設及び機関等は、必要に応じ、ボランティア活動のリーダーとなる人の資質・能力の向上を図る機会を設けることが必要である」<sup>(21)</sup>としている。また、上條も、ボランティアの養成・研修事業の役割の一つとして、ボランティアグループ等のリーダーを養成することを指摘し、ボランティアリーダーの養成・研修の機会を設けることが肝要であるとしている<sup>(22)</sup>。「解説技能を伴う指導性」の向上が見られたのは、このような社会的要請・期待に合致した内容のプログラムを研修会が提供している結果と考えてよからう。

「コミュニケーションの自信」については、

事前で2.51点と、かなり高い値である。これは、初めから他者と接するという資質・能力が高く、人と関わることを好む傾向にある者が、研修会に参加していることがうかがえる。そして、そのさらなる向上に、研修会はいくらか役立っているようである。ボランティアとして活動していく際に、様々な人々と接する場面が多く生じることは想定でき、その際に必要となる「コミュニケーションの自信」という基礎的なスキルが第1因子として抽出され、向上したことは意義があろう。金子は、「ボランティアとは、困難な状況に立たされた人に遭遇したとき、自分とその人の問題を切り離して考えるのではなく、相互依存性のタペストリーを通じて、自分自身も広い意味ではその問題の一部として存在しているのだという、相手へのかかわり方を自ら選択する人である」<sup>(23)</sup>としている。そして、「個人や社会への「かかわり方」と「つながりのつけ方」は、社会を多様で豊かなものにする、新しいものの見方と、新しい価値を発見するための人々の行動原理を提示する」<sup>(24)</sup>ことを述べている。このように、他者と触れ合い、コミュニケーションをとることは、ボランティアとして活動する上でも、また、生涯学習社会で生きていく上でも、その基本であると同時に不可欠な要素であると考えられる。

「国際性」については、異国の文化に関心を持ち、将来、国際的に活動したいという2項目からなる因子として抽出された。事前(2.18点)と比べると事後(2.37点)の方が0.19点の増加があり、統計的には有意であったが、それほど大きな向上とまでは言えないだろう。最近の青少年教育施設の事業では、日本在住の外国人との交流を含んだプログラムもしばしば見られる。ボランティアとして活動するためには、これらの外国人とも気軽に交流したり、日本人参加者との橋渡しをする能力が必要とされるであろう。ただ、当初予想した、項目「様々な国の

人々に親切に接することができる」と項目「言葉がわからなくても身振り・手振りでコミュニケーションできる」は第1因子に、項目「海外のボランティア事情について理解がある」は第2因子に含まれることになった。そのため、「国際性」とは、将来的に、国際的に活動したいという、やや限定的な因子となった。一方、逆に、第1因子や第2因子は、「国際性」をその中に包含したより幅広いコミュニケーションの自信、及びグローバルな視点からボランティアの多様性を捉える資質・能力であると理解できる。例えば、具体的には、外国人と接する機会があり、会話等の語学力を要する活動であれば、「国際感覚」を含む「コミュニケーションの自信」が求められるであろう。あるいは、青年海外協力隊に関して興味があったり、ボランティア先進国の取り組み等についての関心があれば、「国際的視野」も考慮した「ボランティアの多様性の理解」が必要となるケースも出てくると思われる。そのため、「国際性」因子の向上は、5因子の中では最も低かったが、国際意識そのものは、研修会を通じて、十分向上が図られていると考えられよう。

## (2) 「ボランティアの多様性の理解」構成項目の検討

研修会による効果が最も高かった「ボランティアの多様性」因子を構成している下位項目について、さらに検討を加える。そして、「多様性」の中でも、どのような点の向上が大きいかを詳細に見ていく(表4)。最も変化の大きかった項目は、「生涯学習ボランティアについてよく知っている」(0.73点増加)、以下、「ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている」(0.69点増加)、「環境保護・保全についての知識・技能に自信がある」(0.68点増加)、「野外活動についての知識・技能がある」(0.61点増加)の順になった。生涯学習ボランティアの概念や活動分野の多様性の理解に関する効果が高く、さらには、青少年教育施設でできる具体的活動として、環境教育や野外活動の知識・技能の向上も見られる。

次いで、「社会福祉についての知識・理解がある」(0.50点増加)、「ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある」(0.48点増加)、「海外のボランティア事情について理解がある」(0.43点増加)、「ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある」(0.41点増加)という結果になった。13施設の中で、1施

表4 「ボランティアの多様性の理解」因子の下位項目の変容 (4点満点)

	事前調査 (716人)		事後調査 (716人)		平均値の 増加分	t 値
	平均値	(標準偏差)	平均値	(標準偏差)		
(3) 生涯学習ボランティアについてよく知っている	0.84	(0.90)	1.57	(1.01)	0.73	20.15***
(17) ボランティアの活動分野・領域の広さを知っている	1.23	(1.08)	1.92	(1.11)	0.69	17.68***
(6) 社会福祉についての知識・理解がある	1.43	(1.06)	1.93	(1.06)	0.50	14.90***
(24) ボランティア活動を取り巻く現代的課題について理解がある	1.47	(0.99)	1.95	(1.06)	0.48	13.10***
(1) 環境保護・保全についての知識・技能に自信がある	0.89	(0.91)	1.57	(0.99)	0.68	20.66***
(16) 野外活動についての知識・技能がある	1.26	(1.07)	1.87	(1.08)	0.61	16.40***
(8) 海外のボランティア事情について理解がある	0.99	(1.07)	1.42	(1.15)	0.43	11.22***
(11) ボランティア関連事業を企画・運営する自信がある	1.15	(1.03)	1.57	(1.09)	0.41	12.31***

\*\*\*p<.001



設は「社会福祉」の体験活動を含むものであるが、青少年教育施設が主催するボランティア研修会としては、むしろ例外的なものである。それにもかかわらず、項目「社会福祉についての知識・理解がある」に向上が見られるのは、講義等で幅広いボランティアに関する考え方を身に付けたからであると思われる。同様のことが、項目「海外のボランティア事情について理解がある」の向上にも言える。

さて、上記の「社会福祉」ボランティアの要素の強い1事業を除いて、青少年教育施設の主催するボランティア研修会には、青少年教育施設のボランティアとして活動することを主たる目的にした「施設」型と、それに加えて、ボランティア活動の理論の学習にも時間を割いた「生涯学習」型がある。もう少し説明を加えると、「施設」型は、様々な体験活動を通して、施設ボランティアに対する理解を深め、ボランティアとして活動するために必要な知識・指導技術を習得することを目的にしたものである。その活動内容は、野外活動等の実習を中心に、キャンプや登山、レクリエーション指導への取り組みなどに関するものである。「生涯学習」型は、ボランティア活動の理論と技術について学習し、それを社会貢献や自己実現、社会参加の促進に活かすことを目的にしたものである。そこでは、講義中心の研修を行い、青少年教育施設・社会教育施設におけるボランティアの在り方や、生涯学習社会とボランティア活動の関わり等について学んでいる。

なお、この二つの型は、厳密に区分できるものではないため、統計的に数値を示して論ずることは差し控えるが、概ね、「生涯学習」型の方が、多くの因子、多くの下位項目において、幾分向上の度合いが大きい。今日の生涯学習社会においては、絶えず変化する社会の流れを把握しながら、それに対応するための能力を習得することによって、また、発達段階と共に変化

し、多種・多様になる個人の学習要求・意欲を充足させることによって、自己実現を図ることが可能である。そのための一つとして、ボランティア活動への取り組みがあり、ボランティア活動の意義の理解も必要となる。そういう意味で、理論的学習が充実した「生涯学習」型が、やや効果を上げている。

また、「社会福祉」の実習を取り上げている事業は、前述したように1施設であり、「コミュニケーションの自信」や「ボランティアの多様性の理解」についての効果が高かった。これは、青少年教育施設の自然環境に恵まれた立地の中で、敢えて福祉的なボランティア研修会を企画したことが、効果的に機能した結果であると考えられる。高齢者施設や障害者施設の人々との交流を主な活動内容とする、「社会福祉」型のプログラムで、その成果を報告したものに、静岡県青少年ボランティア体験学習プログラムがある<sup>(25)</sup>。ワークキャンプの体験を今後どのように生かしたいかという問いに対して、「今回体験したことを多くの人に伝え、福祉に対する理解を広げたい」という回答が34.1%で最も多く、以下、「今回出会った人達と交流活動をしたい」(20.9%)、「今後スタッフとして協力したい」(20.3%)、「ボランティア活動として実践活動をしたい」(20.1%)となっている。これらは「コミュニケーションの自信」等の向上につながる結果と考えられる。また、山口らの報告<sup>(26)</sup>は、ワークキャンプによって、中高生がボランティア活動をより身近に感じ、日常的な活動として認識するようになったことを指摘している。これは、「ボランティアの多様性の理解」の向上につながる結果と考えてよさそう。

#### Ⅳ まとめ

ボランティア研修会に期待される効果として、「コミュニケーションの自信」、「ボラン

ティアの多様性の理解」, 「解説技能を伴う指導性」, 「自己実現への意識」, 「国際性」という5側面があることが因子分析で明らかになった。研修会の効果を検討した結果, とりわけ「ボランティアの多様性の理解」と「自己実現への意識」の向上に有効であることがわかった。

その中で, 最も効果があった「ボランティアの多様性の理解」を取り上げ, 項目レベルで検討した。その結果, 生涯学習ボランティアの概念や活動分野の多様性について理解を深めるとともに, 青少年教育施設での取り組みが可能な, 環境教育や野外活動の知識・技能を高めていることがうかがえた。結城は, ボランティアの「養成・研修プログラムの立案に当たっては, ボランティアの理念など総論に終始することなく, 具体的な事例を示しての学習や実習なども取り入れて実践的なものになるよう工夫する」<sup>(27)</sup>ことが望ましいとしている。研修会では, 生涯学習社会を念頭に置いた講義中心の理論学習とともに, 野外活動等を通じた, より具体的・実践的な学習でも成果をあげており, 適切な研修が実施されていると言えよう。

最後に, 本研究では, 国立青少年教育施設が主催している研修会を対象に調査を実施したため, 「施設」型と「生涯学習」型の研修会が中心となった。しかし, 他の青少年教育施設や社会教育施設, あるいは民間でも, 「ボランティア研修会」と称する研修会は行われているであろう。ボランティアの活動分野・領域が広いことは周知の通りであり, 青少年教育施設以外は, むしろ「社会福祉」型が多いのかもしれない。あるいは, 加藤が, 生涯学習ボランティア活動と福祉ボランティア活動を融合したボランティア活動が求められていると指摘するように<sup>(28)</sup>, それに対応するための複合的な型のボランティア研修会も存在する可能性がある。そうした「社会福祉」型等の効果測定も行い, 「施設」型や「生涯学習」型と比較・検討すること

は, 各研修会の特徴の把握に有用であるとともに, 今後のボランティア研修会の在り方を考えていく上で, いくつかの示唆を与えてくれるのではないかと思われる。

## 付 記

本論文の作成にあたり, 調査項目を選定する段階で, 聖徳大学教授松下俱子先生に御指導いただきました。心より御礼申し上げます。

## 参考文献

- (1) 生涯学習審議会答申『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について』1992
- (2) 伊藤俊夫「生涯学習理念と青年の家=レポートを読んで=」『青年の家の現状と課題—第23集—』pp. 1-7 社団法人全国青年の家協議会 1995
- (3) 讃岐幸治「青年の家とボランティア活動」前掲(2) p. 15-20
- (4) 青少年教育施設ボランティア研究会『青少年教育施設ボランティア養成プログラム開発に関する調査研究～調査報告書～』p. 4-7 1998
- (5) 財団法人 内外学生センター『「学生のボランティア活動に関する調査」報告書』pp. 5-7 1998
- (6) ベネッセ教育研究所『モノグラフ・高校生 '98 vol. 53 社会とのスタンス—高校生の社会意識—』pp. 28-34, 107-108 1998
- (7) 前掲(4) pp. 32-33
- (8) 社団法人 全国子ども会連合会『子ども会活動等の団体活動経験者の行動特性に関する調査』pp. 29-32, 77 1995
- (9) 前掲(6) pp. 72-75, 113-114
- (10) 前掲(6) pp. 15-17, 102-105
- (11) 前掲(5) pp. 19-21, 84
- (12) 前掲(4) pp. 22-25
- (13) 総務庁青少年対策本部『「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書』pp. 61-65 大蔵省印刷局 1994
- (14) 千石保『日本の高校生 [国際比較でみる]』p. 200-216 日本放送出版協会 1998
- (15) 埼玉県立南教育センター 研究報告書第262号『小・中学校におけるボランティア教育の在り方に関する調査研究』pp. 6-7 1998
- (16) 伊藤俊夫「施設間連携と施設融合論の視点」『平成7年度主催事業等集録集しゃくなげ第9号』pp. 1-6 国立花山少年自然の家 1996
- (17) 坂口順治「青少年とボランティア活動」森井利夫編『現代のエスプリ 321 ボランティア』pp. 53-63

至文堂 1994

- (18) 名賀 亨「ボランティア活動を始めるにあたって」  
巡静一・早瀬昇編著『基礎から学ぶボランティアの  
理論と実際』pp. 140-155 中央法規出版 1997
- (19) 岡本包治「生涯学習と学習ボランティア」日本生  
涯教育学会年報 第14号 pp. 3-11 1993
- (20) 前掲(17)
- (21) 前掲(1)
- (22) 前掲(19) 上條秀元「学習ボランティアの役割と養  
成」pp. 13-27
- (23) 金子郁容『ボランティア もうひとつの情報社会』  
pp. 111-113 岩波新書 1992
- (24) 前掲(23) pp. 69-72
- (25) 前掲(17) 平田厚「高校生ワークキャンプ—静岡県  
青少年ボランティア体験学習プログラム」pp. 168-  
173
- (26) 日本YMCA阪神・淡路大震災地域復興協力キャン  
プ参加者意識調査研究委員会『YMCAスタディシ  
リーズ⑭ 明日を創るボランティア』pp. 65-67 日  
本YMCA同盟出版部 1995
- (27) 結城光夫「生涯学習ボランティアへの支援」岡本  
包治・結城光夫共編『学習ボランティアのすすめ—  
生涯学習社会をめざして—』p. 30-32 ぎょうせい  
1995
- (28) 加藤千佐子「生涯学習ボランティア活動と福祉ボ  
ランティア活動の体系化に関する研究—市民活動と  
してのボランティア・ネットワークの視点から—」日本社会教育学会編『ボランティア・ネットワ  
ーキング—生涯学習と市民社会—』p. 101-109 東洋  
館出版社 1997